2012 年　8 月 11 日・「岩手日報」では

「脱原発」の詩集刊行　本県関係者ら思いつづる

東京電力福島第 1 原発の事故によって、生命が危機にさらされている。その心の叫びを県内外の詩人が言葉に託した「脱原発・自然エネルギー 218 人詩集」がコールサック社（本社東京都）から出版された。悲劇的な現実と、目指すべき未来が、さまざまな視点からつづられている。

奥州市出身で福島県南相馬市に住み、原発の危険性を長年訴えてきた若松丈太郎さんは、原発周辺から人々が避難した風景を「神隠し」になぞらえ、「ふりむいてもだれもいない／なにかが背筋をぞくっと襲う／広場にひとり立ちつくす」と書いた。

ほかに本県関係者では森三沙さん（盛岡市）、金野（こんの）清人（同）、東梅洋子さん（北上市）、児玉智江（ちえ）さん（同）らの作品が収録されている。

広島の原爆慰霊碑の言葉にちなみ、詩「繰り返された過ち」を作った上田由美子さん（広島市）は、核のない社会への悲願をつづった。自然エネルギーを利用した発電への希望や、不便であっても豊かな自然に囲まれる幸福を表現した詩も集まった。

日本人だけでなく、米国や英国、インド、韓国など海外の詩人 23 人も参加。外国の読者にも届けるため、全ての詩の英訳も収録している。

出版に際して東京都港区の国際文化会館で記者会見したコールサック社代表の鈴木比佐雄さんは「原発の本質的な恐ろしさを書いてきた詩人は多い。詩人の自由な立場、さまざまな感性で作ったものを読むことに意義がある」と話した。

と紹介されています。